わが師わが友 (その 6)

— 在 日 10 人 —

岡 村 誠 三*

在日外人の科学者の中には高分子屋が案外と多い。いろいろと会って話される便宜もあろうかと今回は電話つきで在京の知人を列挙することにした。

大使館にはそれぞれ文化または科学担当官があるので十分に注意しながら利用されるとよいと思う。イギリス大使館の Science Attaché は Don Packham 博士 (03-265-5511) で縮合系合成樹脂についてすでに多数の論文を発表されている。忙しい外交の仕事があるのに家で欧文誌の「Polymer Journal」英文審査に応援していただいている。高分子の話をするるとたいへん楽しいといわれるのであるが、それだけ大使館の本職がたまって忙しくなるから、長時間はとても無理のようである。アポイントメントを十分に取っつけてからでないとなかなか胸襟を開かない英人氣質も加わって、初対面ではちょっと冷たい感じがしないでもない。とくに大使館の外人の女秘書には冷たい感じの人もあり、ちょっとシキイが高い。でも案外に温い人柄であることが後でわかって安心する場合も多いから押しの一手でやってみること。I. C. I. 東京支社の Woolgar 博士 (03-211-6661) も合成関係の高分子屋で、やはり P. J. の手伝いを頼んである。

長身で外見も内実も学者肌、お二人とも一生懸命やってもらってはいるが、本職が忙しいので、最近のように P. J. の投稿がふえるとその処理に円滑を欠くことなしとしない。

そこで British Council の、東京では Beatty (03-264-3721) と京都の Hardy (075-791-7151) に待機してもらってある。お二人とも組織をもち、ちょっとした相談にはたいへん気軽に応じてもらえる。

同じ緯度の国としてオーストラリアはわれわれに身近い感じであるが、土地の人だと例の Today を to die と発音するクセがあり、たいへん聞きとりにくい。大使館の人はイギリス本国との交渉が多いためか、ナマリの少ない人が多い。参事官の Kentwell と Eck (03-453-0251) が P. J. 参加。Kentwell は神戸で高校の英語の先生をしていたとかで日本語は気味が悪いくらい達者。学会の懇親会などによく出席する。専門は違うが高分子

が好きだとか。オーストラリア大使館の科学官は原子力担当の Rotsey 博士で専門は金属の疲労問題の由、材料工学全般になかなか造詣が深いようである。

ACS, Chemical & Engineering News の Tokyo Bureau には McAbee 博士 (03-584-1035) がいて大活躍、毎号日本からの記事を掲載して喜ばれている。前任者の McCardy はいま CEN の主筆。思いきった巻頭言を書いたりして時折物議をかもしているらしい。在京当時なにしろ真赤なホンダのスポーツカーを乗り回して外人記者クラブの駐車禁止の玄関へ乗り捨てるなどなかなかの元氣な彼であった。

在京すでに 10 年以上、友人も多く言葉も自由で、自分では半分まで東京人になってたつものの Stanford, 野村研の Stefens 博士 (03-211-3811) と、もと Esso, いま Becton の Nagel 博士 (03-403-9991) はいずれも高分子屋。Huggins 先生や、後者は Kennedy 教授の紹介者としてもわが国の高分子学者と近い。日本の MITI の無公害自動車 5 年計画を大いに感心している。

スウェーデン大使館の科学官 Hornmark (03-585-3774) は高圧工学の研究者。静岡生れの夫人とたいへん仲がよく東南アジアなど飛び回って大活躍。前任者の Delaryd (03-214-5586) はいまは Skandinaviska Banken の東京支配人におさまっているがもともとは技術屋。大使館の文化担当官の Halgqvist (03-467-4619) は研究面ではあまり詳しくない。わが外務省でも文化には学術研究は入らないらしいからいずこも同じか。在京の外人研究者はいずれも電話 1 本の予約で会えることだし今回は写真はすべて省略した。

さてこれで前後 6 回にわたり、北欧、中欧、東欧、米州、西欧、在日と 15 カ国ちょうど 100 人を 1 人 3~5 行ぐらいで紹介してきたことになる。専門も片寄り高分子全体としても 1/20 か 1/30 にも及ばなかった。それでもこうして並べてみると学問を通じての国際協力の可能性はずいぶんと広い。高分子を共通の話題とする「わが師、わが友」のすばらしさにいまさらのようにありがたく、「もの皆、師」という言葉を、初回述べたように「紙面がもたない気もするが」なぜ続けてきたかの言い訳として、このシリーズの小生の担当を終らせていただく。

Seizo OKAMURA 京都大学 (工学部高分子化学科・606 京都市左京区吉田本町) 教授・工博